

## 大学における研究と教育 —— 畑敏雄氏の行履と言説に学んで ——

宮 坂 広 作  
Kousaku MIYASAKA

### はじめに——テーマとモチーフ

本稿のテーマは大学問題である。「大学問題」とひとくちにいっても、内容はすこぶる多様である。ここでは、問題の中でも重要な分野であると思われる研究と教育の二つをとりあげることにした。この二つで大学問題が尽きるわけではないが、二つをとりあげれば大学問題の中心的な部分に迫ることができるであろう。狭小な紙幅の中に収めるのだから、どうしても浅薄・粗雑な素描にならざるをえない。検討すべくして放棄し、言及を欲して断念したものは許多である。

こんにち、わが国の大学が直面している課題には、まことにきびしいものがある。大学人、とりわけ運営の局にあたっている人たちにとって喫緊の問題は、受験者数の減少である。特に、地方弱小大学では学生確保が困難であり、全国の短大のかなりの数がいわゆる「定員割れ」現象を起こしている。中央・大手の大学さえも受験者の減少をまったく免れているところは多くないのであるから、いまや日本の過半の大学は「サバイバル」の危機を迎えていると言ってよいであろう。<sup>(1)</sup>

こうした問題状況に立ち向かうべく、ほとんどの大学がなんらかの対策をうち出している。まずは宣伝の強化、入試方式の変更、卒業生就職率の向上といったところに努力が向けられる。<sup>(2)</sup> まじめな大学では、教育の改善に工夫している。<sup>(3)</sup> もっとまじめな大学では、研究の質を高めるために取り組んでいる。<sup>(4)</sup> 大学の設置者・管理者側の対応としては、施設・設備の改善に目を向けてきたところが多い。涙ぐましい努力が幸いに報われたところはよいが、効果があがらず、廃校あるいはその寸前という状態に追い込まれているところもある。

時代の風潮は、大学の存立にとって冷淡、むしろ冷酷といえるだろう。「競争による淘汰」・「自己責任の原則」というのが時代思潮である。不良債権の処理を果敢におこなわなかったことで、日本経済に破局をもたらしたという事で金融機関が責められた。巨額の公費が注入され、公定歩合もゼロに近いほど政策的に厚遇されたのに、金融機関ははかばかしく立ち直れなかった。目下危機にある大学に対して、国の援助策はほとんどなく、「自力更生」を要請するのみである。

短大サバイバルのひとつの方途として、四年制大学への転換に望みをかけるケースが多い。しかし、これには多額の資金が必要である。国費の援助は見込めないの、県や市の補助金は不可欠である。ところが地方自治体もおしなべて財政難であるから、おいそれと金は出しにくい。中部地方のある県の短大は、四年制化を目ざして広いキャンパスに移り、そこにモダンな校舎を造営した。ところが当てにしていた県費からの補助が得られず、安定的運営に必要な資金に欠けるということで文部省の認可が得られなかった。堂々たる施設を誇りつつ、学生募集に苦しんで今や存亡の淵に臨んでいると聞く。

長野県の場合、東京理科大諏訪短大、松商学園短大の四年制化について、当時の県当局者はたいへん寛容に補助金支出を約束した。さすがは「教育県」である。オリンピック後遺症ともいべき膨大な赤字財政に苦しむ県が、教育のために金を惜しまなかった太っ腹は、まことに見あげたものである。片や岡谷市は、豊南短大の四年制化に協力し、その立地に援助しようとしたが、市議会・市民のあいだに慎重論がつよく、短大側が市長の苦境を配慮して撤退した。イシューは大学の内容は何か、それは市民益にかなうか、また、学生は集まるかであった。市議会内外でこうした問題がさかんに議論され、与党多数の議会ではあったが、市長は強行突破しえなかった。市長はまだ大学誘致に執念を燃やし、こんどは理工系大学を招こうとして県費補助を求めたが、新知事はそれに同意していない。

これに対比すると、前記二大学への県費支出の決定は、きわめてスムーズにおこなわれていた。諏訪短大には東京理科大というしっかりした親大学があり、また理工系大学という時代の社会的要請に応えうるものがあり、また同地域には他に大学がないという条件もある。松商の方には、同窓会を中心に強固な支援組織があり、県・市当局や県議会に対する大きな影響力があったであろう。補助金支出の是非をめぐる、小むずかしい議論があったわけではなく、田中新知事はそこを問題にしたのである。県民益という基準に照らしてシビアにそのメリットを吟味すべきだと言うのである。

四年制化は、それを存続のための唯一の方策と考える大学関係者にとっては切なる悲願であり、また立地する地域社会にとっても歓迎されるべきものであろう。しかし、長野県内であっても通学が無理で、大学の近くに下宿しなければならない地域からみれば、県外の大学と比べてとくに魅力はないかもしれない。就職のさいは、一般に地方大学は不利である。よほど内容的に特色があり、高校卒業生を魅きつけるものがなければ、こんごの存続は保証されない。田中知事がその点について問題提起をしたのは当然だと思われる。新首長というのは、概して前首長の施策に対して異議を唱えたがるものであるが、このばあいはそうした無用な申し立てではないだろう。

わが短大も、新学科増設によって存続、否、発展を目ざしているので、上記の問題はひとつではない。幸い、わが短大は福祉系の学校として、人々の幸福の増進のために働く人材

の育成に努めてきた。短大とはいえ、そうした専門的な仕事に就くことのできる資格を付与する教育機関である。社会貢献を志向する大学として胸を張れる立場なのである。とくに長野県の保育・介護の分野でりっぱに働いている幾多の卒業生をもっている。このような性格の短大であればこそ、筆者自身、晩年を少しでも意味あらしめようと願って前任大学のつよい慰留をふりきってまで、あえてこの短大への就職を希望したのである。

しかしながら、福祉系の大学であればみんなりっぱな大学かといえば、もちろんそんなことはない。どんな大学であろうと、教育・研究の面ですぐれた実績をあげるためには、すぐれた教職員がいなければならない。教育機関は、幼児教育から高等教育まで、教職員つまり人的資本こそが最重要のエレメントである。それは、プロの野球やサッカーのばあいと同じで、有能・強力な選手を多数抱えているところが有利なのである。まさに、「教育は人なり」なのである。<sup>(5)</sup>

この比喻で言えば、学長（校長）や学部長・学科長は、監督やコーチの役割になぞらえることができよう。プロ球団で、金に飽かせて強力な選手をかき集めても、逆に、いかに名監督であろうと、コーチや選手が無力でやる気がなければ、いかんともしがたい。「勇将のもと弱卒なし」という俗諺はあるが、血気さかんな猛将のもとに能力も意欲も欠いた弱兵が群れている場面を何度も見てきた。監督と選手とのミスマッチという悲劇は、むしろありふれた光景である。

筆者は本稿で、大学の平教員としては強卒、学長としても勇将だったひとりの人物をとりあげ、その行実と言説とを紹介しようと考えている。「名選手、必ずしも名監督ならず」とよくいわれるが、この人は二つの立場で良き働きを示した。筆者にとって、景仰すべき先達である。ただし、筆者はいまだかつて将になった経験がないので、将論を云々する資格はない。リーダーシップ論ということであれば、学科長とか部長とかいった中間管理職のばあいでも、まじめに検討することが必要なテーマである。しかし、以下の行論では、そうしたテーマに触れるところはあまりない。限られた紙幅故である。

さて、筆者の大学教員生活も久しくなった。初めて大学の教壇に立ったのは、1959年、大学院の博士課程を満期退学したときであった。以来、40年余、まさに馬齢を重ねて老境に至った。経験の豊富を誇りうれば良いのだが、徒らに試行錯誤を繰り返してきた面が多い。研究の分野ではそこそこの業績を達成できたと自負しているが、教育は研究に比してはるかに困難である。研究は資料相手の仕事であり、独座してもできる。しかし、教育は学生——人間——相手の仕事である。ときには理性よりも感情が先立ち、偏見や悪意によって行動するのが人間である。齢不惑を超えた教員が、なお性的煩惱を断ち切れず、非行に及んだなどという報道に接するのだから、年齒の若い生徒・学生が没論理・無分別であるのは当たり前である。こういう学生に、教養つまり批判的知性を形培することが、教師の責務である。この

困難な課題に、教師は真摯に取り組まなければならない。<sup>(6)</sup>

それにしても、茫々たり回首40年、苦辛惨澹して教学の実をあげようとしたのに、その成果のなんと乏しいことよ。人にほめられよう、認められようとしてやったわけではない。責任感と良心に促されての悪戦苦闘であった。21世紀初年の年頭、「教育行政学の泰斗」などといわれ、高等教育研究で知られたI氏と歓談した折、氏から「学者五戒」なる警句を聞かされた。それは、学者（大学教員）たる者、「たとえ盲腸になろうとも、長と名のつく役職に就くべからず」、「雑文を書くべからず」、「他大学の非常勤講師になるべからず」など、筆者にとってもかなり耳の痛いフレーズである。「そういう貴君自身は、どのくらい戒をまもられたか」と、嫌がらせでなく訊ねたら、ひたすら頭をかくのみであった。国立の重要な研究機関のトップにこそなかったものの、「次長」の要職を勤めた彼に比べれば、かつて公立短大の学長になることの下交渉を受けて、これを固辞した筆者の方が、まだしも持戒の志をつらぬいていると言えるであろう。しかしながら、どう考えてみても有能な教師だったとは言えない。古稀の年に至っていかに懺悔しても、時既に遅い。わがこと已みぬ、と思いつつもなおこぼさずにはいられない愚痴が本稿である。

### 1. 畑敏雄氏への景仰

願みれば、わが70年の人生は常に黒板とかかわってきた。満州事変勃発の歳に生まれ、日中戦争が始まった年に信州の山の中の小さな分校に入学した。「十五年戦争」がついに終わったのは、中学二年生の夏であった。1950年、朝鮮戦争が起きた年に大学へ入学して以来、そこが基本的に生活の場となった。50年代末から、大学の教室で黒板を背にするようになって今日に及んでいる。その長いキャリアにもかからわず、大学教員として己に欠けるところ少なくないことをわれ自から知る。研究・教育・運営のすべての面で、わが未熟を自覚している。

かつて、師であり同僚でもあった吉田昇氏の死を悼んで、「中道の挫折はいたましいが、人生にはしよせん完結はなく、学問研究にも完成などありえない」と書いたことがある。<sup>(7)</sup> 自己の学問について壮大な構想を抱かれ、他日の完成を期しておられた吉田氏の心情を察しての暗涙をもって、氏の御霊の安らからんことを祈ったのである。その氏の夭折された年齢を筆者ははるかに越えてしまった。半世紀の歳月を徒消して、学成りがたしと歎息しても、甘えた戯言としか冷評されないであろう。70年間の展転、このかん怠惰・消閑の日々を送ったわけではない。むしろ営々として参窮に従事し、めったに欠勤することもなかった。学政への興味は薄かったが、与えられた端役には恪勤したつもりである。にもかかわらず、成果の乏しいのは、つまるところ生来の資質・能力の薄さに由るものであろう。

天資の乏しさを補う方法は、努力のはずである。さすれば、わが努力の不十分だったこと

をやはり反省すべきである。単に努力したというのではだめで、何をいかに学ぶべきかが肝心なのである。良寛は円通寺の修行僧時代には、「入室非敢後 朝参常先徒」(室に入るに敢て後るに非ず 朝に参ずるに常に徒に先んぜり)という猛烈な勉強ぶりであった。<sup>(8)</sup>しかし後に彼はそうした修行が空しかったことを悔やむようになった。<sup>(9)</sup>法華経をもっと早く識っていたら、そんな無駄な遠廻りをしないで済んだのに、という思いである。

書物であれ、人であれ、真の英知を教えてくれる「師」に出会うことは容易でない。もし学校で学んでいるときに、そのような「生きている師」にめぐり会えたならば、それは大きな幸運である。筆者のばあい、憧れて入った中学校でその幸せを享受することができた。そもそもその中学校は、太平洋戦争の末期という苛酷な時代にありながら、明治時代からの長い伝統である自治の校風を少なからず持ちこたえており、リラベルな雰囲気を保っていた。そこには、当時敵性語と言われて圧迫されていた英語について、厳格に堂々と教えて倦まなかった英語教師、万葉集には天皇賛美の歌や防人の歌以外にも秀れた抒情歌や自然描写の歌があることを教えてくれた国語教師などが存在した。<sup>(10)</sup>

また、時流を超えて、真理を探究することの永遠的な価値や、西欧には知的探求の深く長い伝統があることについて教えてくれた、哲学青年のイメージをもった教師がいた。戦後になって復員してきた教師で、かつてこの中学の地理科の教員として著名だった三沢勝衛の生涯と思想について詳細に教えてくれたひといた。<sup>(11)</sup>その教師たちのように、学問と教育とを将来の仕事にしようと決心したのである。

大学・大学院といった修行時代にも、その後の社会生活・職業生活の中でも、恩師と呼ぶべき人びとと出会ったことに深く感謝している。その人びとも、既にみな泉下の人になってしまわれた。<sup>(12)</sup>筆者は今や、他に師を求めるのではなく、自らが師になるべきなのである。若い人たちから求められ、敬愛される、師の名に値いする教師にならなくてはならない。その自覚は必要である。しかし、筆者は己れの欠陥・非力を自認するが故に、依然としてわが師を求め、啓発されることを希求せずにはいられない。ここ数年筆者は故人の中に師を求める努力を続けてきたが、生者の中にも求めるべき師は存在するはずである。

生者の中に見いだした師が、畑敏雄氏であった。かつて群馬大学における社会教育主事講習の講師として招かれた際、前橋市内の古書店で畑氏の著書『学長閑話』とたまたま出会い、その内容に大きな感銘を受けた。<sup>(13)</sup>その後、旧制一高の同窓会が主催した畑氏の講演会で氏の講話を聴くことができ、感銘を新たにした。そこで後日、氏にお願いしてインタビューに応じていただき、また貴重な資料も頂戴することができた。本稿は、畑氏から教えられたものを踏まえつつ、大学人のあり方について自省したものである。つまり、畑氏そのものを対象にする研究というより、畑氏の言行から示唆を受けながら、われわれの当面する大学問題について考察を試みた。我田引水の罪は、われ自らの知るところである。畑氏に累を及ぼ

すおそれについては、畑氏におわびしなければならない。

## 2. 畑敏雄の人生と実績

### (1) 畑氏の少年時代

畑の出生地は大阪である。当時、父親がシンガーミシンの輸入をおこなっていた会社に勤務していた関係からであった。

彼の父親は福井県の生まれで、若い時に上京して沖電気に勤めた。家はもと武士だったとのことだが、学歴はなく、腕の良い職人であった。下宿していた家の娘と結婚し、4人の子をもった。敏雄は次男であり、兄は4歳年長であった。弟妹は幼くして死んだので、男兄弟2人が育てられた。

母親は富山県の出身で、元は庄屋の家柄だったというが没落し、母親と娘のふたりが上京して、その家に下宿していた敏雄の父と娘が結婚したのである。敏雄の母親は少女の頃、家が零落したために高等女学校に進学できなかったことを口惜しく思い、進学できた友人から教科書を借り、それを書写して独学した。

どのような方法によったのかさだかでないが、母親は看護婦の資格を得て、ある時期その仕事に就いていたらしい。母親は、自分も向学心が強かったし、また、こどもたちに対してはきわめて教育熱心であった。敏雄の父はシンガーミシン関連の会社を退職して、ミシンの製造・販売をおこなう会社を設立したが、事業はうまく行かず失敗したというから、畑の家は裕かではなかったろう。そうした家庭の主婦としては異例に、敏雄の母親は教育につよい関心をもっていた。

敏雄は少年時代を東京の駒込で過ごしたのだが、それは山の手と下町の接点というか、両方の特色が混在する地域であった。敏雄は、身体も精神も活発な少年として、遊び場に恵まれた環境の中での楽しい生活を享受した。

母親の教育関心は、まず長男に集中的に向けられた。裕かならざる家計をやりくりして、教育費を捻出した。長男は数学の才能に秀で、小学校から七年制高等学校に進学した。武蔵の第一期生であったが、七年制高校は旧制中学への入学に比べて、よりきびしく困難な道であった。

敏雄は、兄のような指導や援助をうけることなしに、中学校の入試に臨んだ。武蔵も受験したが、これは不合格になった。兄が武蔵で「有名人」だったことの影響ではないかというのだが、その結果府立五中に入學した。創立時の校長だった伊藤長七がまだ在任しており、進歩的な教育理念のもとに五中は運営されていた。<sup>(14)</sup> この学校に入った敏雄は、生来の自由闊達な性格にさらに磨きをかけることになった。

夏休み自由課題研究で、江戸城をテーマとして選び、図書館で徹底的に資料を調べるとと

もに、皇居の回りを歩いて実地調査をおこなった。このレポートは教師から激賞され、敏雄は調査研究をおこなうことに深い興味を抱くとともに、この能力に自信をもつようになった。

敏雄の関心は考古学に向けられた。彼は考古学の専門雑誌を購入し、学会の研究会に出席するなど、まるで専門研究者のようにふるまった。学校内に考古学研究サークル、「探古会」を組織したが、教師の力も借りずにまったく自主的に動いたことを、伊藤校長はたいへん喜び、「しっかりやれ」と励ました。

## (2) 畑氏の高校時代

畑は、四年修了で一高を受験したが、不合格となった。同級生の何人かは一高に進学して行き、その中には彼の親しい友人もいた。五年になってもあまり受験勉強に熱中したわけではなかったが、卒業時には一高に合格した。理科乙類である。彼の家からは一高まで徒歩20分の距離であったが、全寮制の一高であるから、彼も入寮することにした。1930（昭和5）年の春のことである。

その前年は、あの世界大恐慌が始まった年であり、翌年には満州事変が起きている。つまり、当時の日本は深刻な経済不況のただ中にあり、それからの脱出のために中国侵略政策を選んだのである。一高生の間には、マルクス主義が広く深く浸透していた。旧制高校の多くに同じような傾向がみられたが、中学生の中にさえマルクス主義に関心をもつ者があり、五中のばあいも例外ではなかった。

一高で一年上級になった中学時代の親友が、畑にマルクス主義にもとづく議論をふっかけてきた。彼との論争に負けまいとして、畑はカントに拠ろうとした。一高に合格したあと、上野の図書館に籠り、桑木厳翼の『カントと現代哲学』などを熟読した。「三大批判書」のようなカントの著作に直接取り組んだわけではないようだが、観念論哲学の概要を把むことはできたようである。

認識論の次元では友人のマルクス主義を論破できると考えた畑であるが、東京の市電のストライキのような、現実社会で進行している諸問題については、カント的な哲学ではどうにも説明がつかないと畑は思わざるをえなかった。畑は、唯物論の優越性を承認すべきだと考えたが、そうする前に、自分自身の思考を徹底的に突き詰めてみなければならないと決心した。

学校を休んで10日間程自室に籠り、一切の図書を斥けて、ただ「デンケンブッフ」と命名したノートだけを用意し、「物質とは何か」といったテーマについて考えられるだけ考え、結論をノートに書き留めるという作業をおこなった。借り物ではない、自分の思想をつむぎ出すための、必死の苦闘をおこない、結果として唯物論的立場を確立することになった。もっとも、こうした孤独な思索にもまして、本郷通りの市電をすっかりストップさせたストラ

イキを目のあたりにした体験の衝撃が大きかったという。

こうしてマルクス主義を受容し、左翼運動のシンパになった畑であるが、高校一年を修了する頃、母親が病死した。母親は重い病気で入院していたが、長男が2年も遅れて武蔵高をようやく卒業したのに、東京帝大の入試に落第したことに落胆したための死だったかもしれないという。この兄はバスケットボールの選手として有名であり、運動に打ち込みすぎて留年したのである。豪放磊落な性格で、実に魅力的な人物であったが、中学生・高校生時代の畑はこの兄とよく喧嘩し、時には腕力沙汰にもなった。

妻に先立たれてがっかりしている父親を支えねばと考えて、畑は寮を出て家に戻った。通学生になったのだが、スポーツは続けており、高校生生活は大いにエンジョイした。この間、当局の弾圧によって一高内の共産青年同盟が壊滅してしまい、畑がその再建に当たることを要請された。共青同盟員になることは、共産党員になることとほとんど同様な重罪とみなされた当時のことであるから、畑もその要請を受け入れるか否かを真剣に考えざるをえなかった。「逮捕されたとき、飽く迄守秘できるかどうか自信がないので、同盟員になる資格がないと思う」と、ひとたびは辞退したのだが、重ねての要請に承諾することにした。

「自分に対して要請されていることに、自信がないという理由で拒否するのは卑怯である」という心境になって、受諾に踏み切ったという。それは、学歴を利して立身出世していくというみちを放棄することであり、その逆に犯罪者・「国賊」として迫害される人生を選択するということである。亡き母の期待を裏切るということでもある。畑はそうしたことをすべて振り捨てる覚悟をして、左翼活動に入ったのである。<sup>(15)</sup>

といっても、機関紙を数回発行したり、『無産青年』や共産党機関紙『赤旗』の配布をしたりするくらいで、もちろん公然活動ができる状況ではなかった。バスケットボール部の友人に、反宗教同盟の機関紙を郵送したところ、これが先方の家族の手に入ったためであろうか、畑は警察に逮捕され、その入手先を追及された。「本郷の夜店の古本屋で買った」と弁解して、なんとか釈放されて東京帝大の医学部薬学科の入試を受験した畑であったが、一高卒業寸前に再び逮捕され、強烈なテロを受けた。共青機関紙を配布していた友人の名前をひとり言わざるを得なかったことを、畑は今に至る迄申し訳なく思っている。

こうして、畑は他の同盟員と共に退学処分となった。彼は地下活動に入ろうと思ったが、組織との連絡がつかないまま、父親のはからいでしばらく房総半島の海岸で過ごし、結局他の学校に入り直すことにした。横浜高等工業学校に入学し、同級生よりは3、4歳年長であったが、彼らに馴染み、学業でも運動面でもリーダー格として活躍した。この学校がリベラルな校風だったことも幸いして、彼はここでの3年間をけっこうエンジョイしたようである。この間、彼は左翼運動とかかわりをもたず、ふつうの学生として身を処したわけである。



### (3)東京工大の教員時代

高工卒業後、東京工業大学に進学し、かなり優秀な成績で卒業して、母校に残った。助手から専門部の助教授となり、やがて学部の助教授に抜擢された。これは同じ卒業年度と同僚の中ではもっとも速い昇進であり、彼は勤勉・有能な若手研究者として実績をあげた。軍国主義時代のことであるから、技術研究はどうしても軍事的な性格を帯びざるを得ず、大太平洋戦争下ではまさに軍事技術そのものの研究となった。畑は研究作業の創造性に魅力をおぼえ、研究に熱中したらしい。帝国主義戦争への加担に良心の苦しみをおぼえるといったことはなかったようにみえる。彼は研究の目的の是非について思索するよりも、研究方法の工夫に没頭し、最大の成果をあげようとする技術学的思考様式の持ち主なのではないだろうか。一高生時代の哲学の勉強も、存在論的テーマより認識論に傾斜していたことが思い合される。

戦後、畑は大学内における教職員組合運動に精力を傾注し、学内反動勢力と対峙して民主化闘争をおこなった。かつて、一高共青の再建を彼に要請した、一年上級の伊藤律が戦後共産党の中樞にいたこともあり、畑は戦後早い時期に入党し、以後40年間にわたって黨員であった。学者・文化人は党中央委員会直属という制度であったが、東京工大という職場でも彼の党籍は半ば公然であった。教授会で、「共産党（員）として畑はどう考えるか」といった挑発的な発言をした「反動教授」があり、畑はそれに対して、「共産党としては・・・」と応酬した。

大学教員である共産黨員は、自分の党籍を隠し、自分の意見を堂々と述べようとしなければ、筆者の周囲では多かったように思われる。黨員だからということで警戒されてマイノリティになったり、党派的発言として初めから排斥されないようにするための用心であろう。その点、畑はきわめてオープンであり、フランクである、「快活な」陽性の黨員であった。

その頃、畑たちが伊藤律を工大に招いて講演会を開催した。演説の中で反米闘争を煽動したという嫌疑がかけられ、畑はGHQに召喚されて訊問を受けた。<sup>(16)</sup>「そのような言論はなかった」と突っぱね、最後には帰宅を許されたが、後になって考えてみると、よくも放免されたものだと、畑は事態の深刻さを今更のように認識する。強面に反応し、断乎として否定したことで成功したのであろう。そう言えば畑は戦前の徴兵検査で徴兵官の高級将校から、日本共産党（実はコミンテルン）の革命テーゼを知っているかと聞かれたとき、その内容を詳細に説明して徴兵を免れた。こうした危険人物を入れて、軍隊の赤化でもやられては困ると考えて忌避したのだらうと、畑は呵々するのであるが、これも後で考えれば冷や汗がどっと噴き出るようなリスクな挑発であろう。「こんな非国民は軍隊に入れて、根性を叩き直してやろう」と考える、強気の軍人と出くわす可能性も大きいからである。

好運な畑は、反米の咎でGHQに逮捕もされず、工大の中でも小さくなる必要もなく、むしろ

ろ大手を振って闊歩していたようである。なにしろ、時代は民主化へと向かっており、工大は新しい大学として自らを再生すべく、さまざまな革新が試みられていた。当時の学長たちは概ね進歩的であり、畑もこれら学長を支持して大学革命の流れに棹さしていた。学長や大学首脳部としても、教職員組合や学生自治会に影響力のある畑を、自らのウイングの中に抱えていることを有利と見たのであろう。

原水爆禁止の大衆運動が始まると、畑はその運動を組織し、指導する役割を担うことになった。原水禁の代表者は安井郁であったが、彼は外国に出歩くことが多く、国内でも講演などで多忙だったので、実務は畑が処理しなければならなかった。畑は当時平和委員会にいて、そこから原水禁に出向して事務局次長の役割を担ったのである。<sup>(17)</sup> 畑は前後10年ばかり、学内の仕事はほとんどせずに、もっぱら外部の運動に奔走した。

原水爆禁止という平和運動の歴史的意義を思えば、この推進に情熱を傾けたのは、立派な生きざまだといえるであろう。畑は、その当時も今も、そうした生き方をしたことを少しも恥じないし、むしろ満足していると述べていた。国民の税金で養われている公務員研究者として、専門外のところで社会運動に没頭することの是非は問われるところであろう。少なくとも筆者のような小心の「専門研究者」には、畑のような生きざまは真似られない。

畑もやがて学内に戻り、科学者・教師としての職務に精励するようになった。高分子の研究に遅れて参加したのだが、この開拓されつつあった新分野に深く興味をおぼえ、全力をあげて研究をおこなった。当然一定の成果をあげ、論文のかたちをなさぬ、アイデアだけの「学位論文」で博士の学位も得て、教育方法で大きな成果をあげ、学会でも重きを成すようになった。

しかし、全共闘派の学生達とは激しくやり合う一方で、教授会では改革派として発言したので、当然孤立することになり、大学運営を担うようなポストには就くことがなかった。研究・教育上では実績をあげたが、管理的な職務についてはあまり能力を発揮する機会がなかったようである。

畑は、東京工大退職後、群馬大学工学部に移り、そこで工大ばりの工学教育をおこない、同学部でもっとも低学力の学生が入学する学科として知られた、繊維高分子工学科の学生たちの潜在的可能性をみごとに開発した。畑の教師としての力量は十分に実証されたのである。1975（昭和50）年、畑は大学学長に選出された。

畑は学長就任の感想として、「思いがけず」とか「交通事故」・「ハブニング」とか、照れのポーズを示しているが、畑のような前歴—— 札つきの共産黨員 —— の学者を学長に選出した群大の教員たちのリベラリズム—— 知性と勇気 —— に敬意を表するものである。<sup>(18)</sup> 畑が就任後、群馬大学の広報誌紙に掲載した文章や学長告辞を読めば、彼の人間性が躍如としており、タテマエよりもホンネで語っている。

学長としての畑の業績について述べることは困難である。<sup>(19)</sup> 彼自身も多くは語らない。得々とわが実績を数えあげるような人柄ではないこともあろうが、そもそも国立大学では学部自治がつよく、学内慣行が幅をきかせており、学長のリーダーシップは制限されている。「民主的な」学長であればあるほど、独断専行をやらないものであるが、畑はまさにそのデモクラットであった。大学の民主的運営には努力したにちがいないが、キャンパスの移転・統合、学部新設などにどこまで貢献してか、筆者にはわからない。

それを解明するために時間と労力を費やす余裕が筆者にはない。それに大学運営の問題に筆者の関心は薄く、研究と教育の問題に集中している。畑から筆者が学ぼうとしているのは、まさにその分野なのである。本稿の紙幅の制約ということもあるが、大学改革の最重要問題はこの分野における革新であり、運営や制度は二の次だと思われるからである。

### 3. 大学における研究と畑氏の研究論

大学の大学たるゆえん、むしろ本質は、そこが学問研究の場だということにある。大学が学問研究をしなくなったら、それはもう大学ではない。<sup>(20)</sup> 大学というものが地上に存在するようになってから、大学では研究活動が展開されてきた。大学は研究機関であると同時に、教育機関でもあるのだが、その教育活動で必要なものは教育内容としての知識である。学問的知識には、人文科学のように過去の時代から各世代が積みあげてきた知の遺産を継承し、再解釈をしていくような分野もあれば、自然科学のように新しい法則の発見に努める分野もある。専門分野は著しく細分化され、学問の体系はおそろしく複雑化している。研究方法も多様化し、学者とひとことでいっても、その人柄もライフスタイルも人さまざまである。

大学も多様化している。研究に重点を置いているのは「大学院大学」であり、数ある大学の中には、研究をあまり重視しているようには見えないものも少なくない。それは、たとえば教員人事において学問的業績を重視しないとか、教員の研究費を最小限に抑えろとか、研究紀要の論文の本数やページを制限するとかのかたちで表象される。学長の選出でも、学者よりも行政家、真理探求者よりも世故に長けた通俗的人物がそのポストに就くことになる。そうした学長であれば、当然研究活動発展のために真剣に努力するはずもない。私学でいえば、理事会とかけあって研究費の増額に努力するような人物でなければならないのだが、そのような人物は必ずしも多くはない。

本来なら学長・学部長が率先して研究活動をおこない、良い論文を書いて垂範することが望ましい。校務に力を注ぐことは当然の職責であるが、多忙の間にも研究活動に精励してこそ、他の教員の研究への意欲を鼓舞するのである。学長・学部長の中には、自らは研究成果をほとんど発表しないのに、教員たちに向かって研究を奨励し、大学紀要への執筆を慫慂するような厚顔の徒がいる。もっとも、学長自らが紀要に論文を書かなくても、文章を発表す

る機会は学内外に多々あるだろうし、また、入学式や卒業式などの式辞を述べる機会もある。それらの言説の中に、多年研究に従事して身につけた学識・教養が自ずからに流露するようであれば、他の教員や学生に真理探求への意欲を喚起することに貢献できるであろう。<sup>(21)</sup> 自ら研究し、論文をつくる余裕などなく、俗務に追いまわされている学部長で、珍しく論文を発表する感心な人も稀にはいる。ただし、数人の共同製作論文のファースト・オーサーではなく、ワン・ノブ・ゼムとして加えてもらっていたのに、のちにこの論文の内容が批判されたとき、学部長としての責任が追及され、けっきょく詰め腹を切らされた例もある。ゆめゆめ名義貸しのような無責任なことをすべきものではない。<sup>(22)</sup> 筆者など老昏また服味の善悪をわきまえぬ無恥になっているので、本稿のようなエッセイを書いている零落ぶりではあるが、他人に便乗して業績づくりをするような恥知らずになるつもりはない。

さて、畑の研究についてであるが、彼の専攻する科学分野は、筆者の窺い知り得ぬところであり、その研究の内実を紹介することも論評することもできない。しかし、研究論・研究方法論として一般化された彼の言説には、興味ぶかいものがある。研究方法論では、武谷三男の三段階論を高く評価し、それに全面的賛成ではないが、有効性のあることを、高分子学の歴史的発展、コロイド学の変遷を例にして説明している。現象論から実体論へ、さらに本質論へという研究活動の発展として、高分子物性の研究はいまや非平衡の熱力学に取り組んでいるというのである。<sup>(23)</sup>

畑の研究論は、単純明快である。研究の動機はすべて「おもしろそうだから」という興味・関心に集約できるが、それも一種のエゴイズムであり、指導教官や上司から評価されたい、良い会社に就職したい、出世したいといった利己的な動機と別のものではない、とする。研究論はそこから出発すべきであり、そういう主観的な欲望を実現しようとすれば、自然の客観的法則との衝突・対立に直面し、弁証法的に解決することが要請される、というのである。欲望で眼のくもった人間には自然の真実はわからず、豊かな人間性、謙虚な心に対してのみ自然は神秘の扉を開くのであり、そのことを認識することによって研究者は自己変革をし、人間的に成長するのだというのが畑の所説である。

畑は『朝日ジャーナル』が東工大について、異端の存在を許し、それを大切に大学だと紹介したのを引用し、大学の人間はみな異端でなければならず、反逆の精神こそが創造の母であり、大学の精神だと論じている。<sup>(24)</sup> しかし、現実の工大では行政権力という亡霊が横行しており、官僚化・サラリーマン化が進行しつつある、と批判する。アカデミック・フリーダムがもう死語化してきていて、経済成長一本やりの大企業本位のための経済政策が自然破壊の公害をもたらしたことと平行に、大学の精神を荒廃させる「大学公害」がひろがりつつあることを、畑はきびしく指弾する。

こうした大学の現況に対して、ほんものの科学者であろうとするなら、いかなる権威にも

盲従することなく、権力主義の大学の体制を批判し、反逆しなければならないと、畑は主張する。変革の対象として、大学という社会も巨大化していて、手を着けるのは大変であるが、まず身近な研究室という環境を良くすることからスタートすべきだとも提言している。存在を変革すべく、対象に働きかける事を通じて自己を変革していくのが、人間の本質であり、人間は「考えるスケベエ」(95%アニマル、5%考える草)であるというのが、畑のリアリティック・アイデアリズム(唯物論的理想主義)である。畑は、真理探求こそが学問の本質だという観念論から出発しない。それではタテマエに終わるだけだからである。

いまどきの若者は生きることの意義も目的もたぬ、価値観を喪失しているという非難に対して畑は、「いいじゃないか、そうであったって。だいたい意義だの目的だの価値だの、誰が決めるのだ。大人の尺度で、または『国』の期待する人間像などで若者を測ろうとするから、そんなグチが出るのだ。」と、一蹴している。<sup>(25)</sup> こうした言説は、上述のようにタテマエ論(観念論)を排除しようとする畑の基本的スタンスから出てくるものである。

そう言う畑が、教育基本法を感激して読み、それに真理を見いだしている。<sup>(26)</sup> 前文言うところの「普遍的にして個性豊かな文化の創造」にコメントして、「民族的な個性的な文化をもってはじめて、世界の普遍的な評価を受けることができるし、独創的な科学技術によってはじめて世界の尊敬を得ることができる」と述べている。第一条に愛国心についての文言が欠けているという保守派の非難に対して、教育基本法が戦前の国家主義への反省の上につくられており、真理・平和・文化創造を大切にすることこそが日本の国を愛する道なのだと反論している。

教育基本法はきわめて抽象的な文言で構成されており、すこぶる理念的である。それを起草した学者たちは、ドイツ観念論哲学、とくに新カント学派の人格形成論に親しんでいる者が多く、一読したのでは確かに観念的である。しかし、それは第二次大戦についての反省という、歴史的・具体的なモメントによって成立したものである。畑は、対象を空間的・時間的に固定化したり、観察者の視点を固定化したりしたら、真理を明らかにすることはできないとし、歴史的に学び、時間的経過の中で真実を把握すべきことを力説する。<sup>(27)</sup> 教育基本法を正しく認識するためには、こうした歴史的パースペクティブの中で解釈し、了解しなければならないのである。了解とは、人間的な理解と共感とをいうのである。

#### 4. 畑氏の実践と教育論

畑自身が語る彼の教育実践は、なかなか示唆的である。彼は工大の研究室で、毎週「土曜会」と称する研究会を開催していた。<sup>(28)</sup> 学部の四年生から大学院生まで、研究室の成員が2班か3班に分かれ、隔週または3週に一度研究会に参加し、報告・協議をおこなうのだが、畑は指導者として毎週出席する。学年を超えたタテワリ・ゼミといった趣きであるが、各人

の研究テーマは自由で、高分子化学とは限らない。「マージャン必勝法」でも「ナンバの方法論」でもよい、とされている。ただ、ふつうのゼミのように、本を読んだ報告や、数式を並べただけのものではだめで、とにかく自分の頭で考え出したものでなくてはならない。

畑の指導法は、峻厳を極めたものである。欠席はもちろん遅刻に対してもうるさい。「言うことはありません」などという逃げ口上は許さない。「貴様、それでも人間か」と罵倒を浴びせる。ひどいことを言っているようだが、人間の本質は「考える動物」というところにあるという、畑の人間観にもとづく痛烈な批判であり、警告なのである。彼はそうした自分の振る舞いを、「ヒトラーのごとき独裁者」ぶりと評しているけれども、彼は地方への出張があっても土曜会に出席するために無理して帰京するなど、自分にもきびしかった。土曜会を大事にするということは、とりもなおさず一人ひとりの院生・学生を大切にすることを意味したのである。

小学校以来考えることのディシプリンを受けて来ず、そのことに馴れていない学生たちは、最初土曜会で音をあげ、苦しむのだが、やがて思考力が発達し、学部四年生であれば卒業論文が書けるようになる。土曜会で発表してさんざんやつつけられても、根性のある学生は修正して再発表、さらに三回目の発表へと努力をつづけ、やがて学会で発表できるような論文を書き上げる者も出る。学生たちは、しだいに土曜会の意義を理解し、それに感謝するようになった。

畑は群馬大学でも、東京工大での指導法を継続した。彼が所属した繊維高分子工学科は、繊維斜陽と不況の影響のせいか、年々志願者が減り、入学者の大半が第二志望・第三志望の学生であった。工学部の中でもっともできの悪い学生とみなされていた学生たちは、畑の指導のもとで蘇った。四年次の学生は、研究のおもしろさを発見し、熱心に研究して、国際的にも評価されるような成果をあげた。畑はロンドンで開かれた国際会議で、学生たちの業績を披露した。

東工大でも群馬大学でも、畑の卒業研究指導の方法は共通で、「研究計画」をじっくり練り上げることを学生に求めた。群馬大では、卒業研究の指導教官を前年秋に決める習慣になっていたが、畑は就任初年度は四月から七月までの3ヵ月間、1週間に1回か2回集中的・組織的に講義をおこない、それを受講した学生たちの反応を聞き、その興味や関心に従ってグループ分けをやって、グループごとに毎週徹底的に討論をしてから、各人のテーマを決めることにした。

大学生の卒論執筆では、テーマを教員から与えられることもしばしばあるのだが、畑はそういうやり方を排し、テーマを学生自身が自主的に決め、その意義と目的を明確につかむようにしたのである。夏休みの合宿研究では、研究テーマと関係のない一般的・基礎的な学習をするのみで、テーマにかかわる実験は十一月ぐらいからようやく始まる。しかし学生たち

は、毎晩のように徹夜して実験に熱中し、短期間に大きな成果をあげた。

考えることの喜びを知り、考える能力（学習・研究の方法）を身につけた学生は、自主的・意欲的な研究活動をおこない、すぐれた成果を収めることができるという実証である。これまでの日本の教育は、文部省の学習指導要領によって規格化された知識を教え込み、入試は限られた枠の中で選別をおこない、かくして生徒・学生の独自性はスポイルされる盆栽（凡才）教育に堕していると、畑はきびしく批判する。<sup>(29)</sup> 日本の教育は、与えられた問題を解く力をつけることができて、問題の発見者・提起者を育てえないでいるという弱点を克服するために、せめて大学でだけでも自主性・主体性の回復と確立に努めなければならないというのが、畑の主張である。<sup>(30)</sup> 大学教員は、学生が自ら学ぶ意欲をもてるようなモチベーションを与えねばならず、研究業績をあげることだけに関心を狭めず、学生の教育に力を注ぐようにすべきだとも言っている。

以上、畑の教育実践と教育論のいずれも、十分納得できるものである。そもそも、筆者が東京大学の大学院でおこなった研究指導のやり方が、畑のものと類似していた。われわれの専門分野は自然科学でないから、実験という方法を使用することができず、注目すべき論文をとりあげて、その方法論を吟味するというやり方をとっていたが、きびしい相互批判によって自分を鍛えるという点では、畑のばあいと共通であった。

大学院のばあいは、この流儀でかなり成功したと思うが、学部ではあまりうまくいかなかった。畑と筆者の指導力の差ということになるだろうが、自然科学と人文・社会科学の違いにも一因があるのではないかとさえ、卑怯な弁明になってしまうだろう。筆者の経験では、学生たちはテキストの要約をするだけで、自分の意見はなかなか言わない。テキストの読解力に欠け、意味をつかむことができないのだから、感想を、まして批判を述べられるわけがない。

学生に問題意識や目的意志が欠如していることがしばしば問題になるが、それ以前に、読解力の獲得が必要なばあいがしばしばである。畑は、「考える人間」になることにかかわって、言葉・文章の力を高めるように努力することを学生に求めた。<sup>(31)</sup> 言語こそは、人類だけがもつことのできる誇るべき文化財であり、それを通してものを考え、考えを深めることができるのだと解説している。

畑の立論は妥当であり、同意できる。彼は論文の形式を考えるばあいに有効な「起承転結」について教えるなど、言語能力向上のための具体的方法に言及している。しかし、こうした考察をおこなうことは、彼に求むべきものではなく、教育学の学徒である筆者の当為である。もとより、その責に任ずべく努力してきたつもりであるが、さしたる成果を収めえないでいることを恥じるものである。ここでは、筆者の実践と挫折について述べる余裕がないので、別稿に譲らざるをえない。

### 結論——補遺

本稿の短い考察を、ここでさらに総括する必要があるまい。さればとて、単なる紹介に終わっている前述を超えて深い考察を展開しようとすれば、紙幅の壁に阻まれてしまう。やむなく、前述では觸れえなかったいくつかの問題をとりあげ、補遺とすることにしよう。

第一に、畑の研究論で十分納得できない点として、研究というのは研究者の内発的な要求に根ざすものでなければならないことには同調するが、それは単に研究者の偶発的な興味・関心に出るものであってはならず、社会的要請に應えるものであるべきだということである。<sup>(32)</sup>「社会的要請」という言葉をもち出せば、現実の社会構成・権力構造のもとでは、国家権力の要求になりやすいことを慮って、畑はそのような要請をもち出すことをあえて拒否したのであろう。とくに工学研究の分野では、社会的要請は即資本・企業の要請を意味しやすいという事情もあるのだから、彼が研究の出発点を個々の研究者の主体性・内発的動機に求めるのは理解できなくもない。

しかし、金を儲けたいとか、出世したいとかいった個人的動機は、国家権力や資本の要請を内面化したものであり、個々の研究者はそのばあい権力や資本のエージェントになっているわけである。たとえ動機がそうであれ、研究過程で自然の固く閉ざされた真理の前に立つことで、研究者は己れの人間性を取り戻さずにはその扉を開けえないとするのは、単純に過ぎ、あまりにも楽観主義的であるように思われる。きわめて利己的な動機・欲望に支えられた研究者が、金にあかせてつくられた巨大装置を使って、まるでレイプでもするように自然を拷問にかけるといふような所業が、あちこちの大学・研究機関で平然とおこなわれているのが現実である。

教育実践の問題についていえば、一人ひとりの学生の可能性を認め、それを大切に引き出すことが必要だという畑の考え方に同意する。しかし、個々の学生によって潜在的能力が違っており、発現する個性にも差異があるはずで、技術教育と芸術教育とでは、内容も方法も異なっているのが当然である。同じ技術教育でも、東工大と群馬大学で効果的だったやり方が、他のすべての大学に適用できるという保障はない。

畑は、教育についてまったく素人だと言いつつも、教育にはプリンギングアップ・ティーチング・エデュケーションの3段階がある、と述べている。それは段階というより、パターンを意味し、発達の段階に適するように組み合わせることが必要だというのである。知識の注入が中心になってきた従来の教育方法をきびしく批判する畑であるが、基本的な知識をきちんと教え込むことの必要を否定などしていない。<sup>(33)</sup>

小・中・高で基礎的な学力を身につけてもらえずに大学へ進学し、そこでの学習に困難を感じ、意欲を喪失してしまうような学生に対して、どのような教育方法をデバイスすべきなのか。専門とする「接着」について啓蒙的な説明をする際に、人間（男女）の接近や別離の



ことまで引き合いに出し、時には肉体的交接にまで話を広げる（落とす）畑の話術は、学生を睡魔から奪い返すのに有効な教育的テクニックなのであろう。それが学生への媚びや下品に堕さない一線をまもっているようにみえるのは、畑の品性のしからしめるところである。しかし、このテクニックは容易に模倣することのできないものである。しょせん教育技術とは属人的であり、教師と学生という実存的人格の間主体的関係においてしか通用しないものであってみれば、一般化や類型化の試みは無意味である。教育方法研究の有効性について、深い懷疑と悲哀の中で擱筆せざるをえない。<sup>(33)</sup>

〈注〉

- (1) 高鳥正夫他『短大ファーストステージ論』東信堂、1998年。黒木比呂史『迷走する大学——大学全入のXデー——』論創社、1999年。中村忠一『大学定員割れ、飛び級、独立行政法人化』東洋経済新報社、2000年。天野郁夫『大学改革のゆくえ』玉川大学出版部、2001年。佐藤進『大学の生き残り戦略』社会評論社、2001年。
- (2) 産経新聞社会部編『大学を問う』新潮社、1992年。
- (3) 毎日新聞教育取材班『大学に「明日」はあるか』毎日新聞社、1998年。
- (4) 浅野攝朗他編『東京大学は変わる』東京大学出版会、2000年。
- (5) 池井望・西川富雄『大学生・教授の生態』雄渾社、1966年。鳥羽欽一郎『大学の転落』（第七章 保守的な大学人）産業能率短大出版部、1973年。大学セミナー・ハウス編『続・大学は変わる』（第11章 努力し、苦闘する教員）1995年。
- (6) 大学問題検討委員会編『日本の大学—その現状と改革への提言』勁草書房、1979年、183ページ。大田堯『自分を生きる教育を求めて』一ツ橋書房、1989年。
- (7) 拙稿「未完の学問と人生」〈吉田昇先生追悼集〉『この道を』1980年。
- (8) 東郷豊治『良寛詩集』創元社、1962年、348～9ページ。
- (9) 良寛『法華讃』偈 第九十三 〈中村宗一『良寛の法華転・法華讃の偈』誠信書房、1987年、332～3ページ〉。
- (10) 拙稿「よき師よき友」〈『清陵八十年史』1981年、787～9ページ〉
- (11) 拙稿「Educator's Mind」〈（牛山正雄先生記念文集）『理想の花の咲かむまで』1983年、205～7ページ〉。
- (12) 拙稿「忘れえぬ師たち」〈拙著『日本社会と市民形成』エムティ出版、1993年、350～62ページ〉。
- (13) 畑敏雄『学長閑話』あさを社、1982年。
- (14) 『立志・創作——五中・小石川高の七十年——』紫友同窓会、1988年。拙稿「伊藤長七論」〈拙著『生涯学習小論集』山梨学院大学生涯学習センター、1998年〉。

- (15) 昭和初期の一高における左翼運動については、次の文献を参照されたい。伊藤律「人生の学舎」〈学生書房編集部『若き心の映像』学生書房、1950年〉。田中武夫『橋樑と佐藤大四郎』龍溪書舎、1975年。河合徹『回想録』近代文芸社、1978年。

のち、伊藤律は日本共産党の「北京機関」で働いていたとき、スパイと断罪され、中国の監獄に27年間幽閉された。伊藤の帰国後、畑はその名誉回復を求める運動を起し、このことが主な理由で党を脱することになった（畑敏雄「伊藤律の名誉回復を求める会」の正式発足に当たって」〈『三号罪犯と呼ばれて』創刊号、1995年2月〉。同「世界人権宣言と伊藤律問題」〈同上誌、第七号、1999年3月〉）。

- (16) 畑敏雄「東京工業大学事件と伊藤律」〈『三号罪犯と呼ばれて』第2号、1996年7月〉
- (17) 樽谷修「対談・科学で現代を語る 6、高分子科学 畑敏雄」〈『群馬評論』1999年3/4月号〉。
- (18) 畑敏雄「昭和町だより」〈『工学部ニュース』1976年1月〈『学長閑話』94ページ〉）。
- (19) 学長として畑が掲げたスローガンは、「群大にルネッサンスを」である。学長になったら暇で困ったとか、遊ぶのに忙しかったなどと言っているが、現場の研究者だった頃に比べれば、余暇に恵まれたのは事実であろう。
- (20) 筆者は若くして教養学部学生だった頃、学友会がおこなった、大学論をテーマとする懸賞論文募集に応じて入選したことがある。当時教養学部長だった矢内原忠雄氏の考え方から示唆を得てのものだが、以来筆者は真理の探求を大学の使命とする古典的大学論を信奉している（矢内原忠雄「学問的精神と大学の使命」〈同、『民族と平和』岩波書店、1982年、527～44ページ〉）。
- (21) 終戦直後（1945年12月）に東京帝大総長となった南原繁の演述集（『文化と国家』東大出版会、1957年）を、東京大学前学長、蓮実重彦氏の『知性のために』（岩波書店、1998年）と比較すると、知性の内容については大きな違いがあるものの、ともに傾聴に値する講演である。20世紀の大学人である筆者は、もちろん前者に親近感をおぼえる。
- (22) 真理探求が天職であるはずの大学教授の中に、ろくに研究論文を発表せず、ものを書けば日本語の体をなさない珍妙な文章を書く者がいることを告発する論者は、いくらでもいる。それにかさねてわざわざステロタイプなものの言いをするまでもないだろう（桜井邦昭「大学教授」地人書館、1991年。同「大学の「罪と罰」」講談社、1994年。大磯正美「『大学』はご臨終」徳間書店、1996年。川成洋「大学崩壊」宝島社、2000年。岡本浩一「大学改革私論 ― 研究と人事の停滞をいかに打破するか ― 」新曜社、1998年）。
- (23) 畑敏雄「科学におけるロマンチズム」〈『学長閑話』240ページ〉。

- (24) 同く同上書、263ページ
- (25) 畑敏雄「青年によせる」く同上書、98ページ。大学教授を罵倒するような著作は、同時に当今の学生の生態についてきびしく論評している（内多毅『大学生』鷹書房、1979年。吉村作治『それでも君は大学へ行くのか』TBSブリタニカ、1992年）。しかし、畑のように、学生に親近感をもち、かつ学生に媚びたり、おもねったりすることのない論者は他にも存在する（尾形憲『素顔の学生たち』青木書店、1993年）。
- (26) 畑敏雄「考える教師、働きかける教師」く『学長閑話』193ページ。
- (27) 同「歴史に学ぶ」く同上書、102～3ページ。
- (28) 同「科学におけるロマンチズム」く同上書、258～61ページ。
- (29) 同く同上書、214～7ページ。
- (30) 畑敏雄「大学に教育を」く同上書、125ページ。
- (31) 同「言葉を大切にしよう」く同上書、126～84ページ。
- (32) 大学の研究教育を考える会編『大学の社会的責任』丸善、2001年。
- (33) この問題は、こんにちいわゆる「学力低下」論争として、かまびすしく論議されている。基礎学力を習得させることと、思考力を発達させることが対立的に論じられているようにみえる。一定の矛盾をはらみつつも、弁証法的に統一されるべきだと思われる（大野晋・上野健爾『学力があぶない』岩波書店、2001年。岸根卓郎『私の教育維新』ミネルヴァ書房、2001年。立花隆『東大生はバカになったか』文芸春秋社、2001年）。
- (34) 教育実践の改革について考えを深めると、技術論の次元ではすまず、社会と人間、文化のありようについて、広くかつ深く考察することが必要になる。つまり、社会改革と教育改革について問題にせざるをえないのである（P、F、ドラッカー『新しい現実』ダイヤモンド社、1989年。森嶋通夫『なぜ日本は没落するか』岩波書店、1999年。小林彌六『新しい経済学と世界観』春風社、2001年。都留重人『21世紀日本への期待』岩波書店、2001年）。

